

『アジア東方フォーラム』

—東洋の智慧でアジアの世紀の任を迎えに行こう—

パネリスト 関根秀治の発表

『東アジアの特性と智慧—新たな智慧のための共同体の構築—』

このたびは主催団体の一つである「国際3E研究院」の周瑋生先生よりお誘いをいただき、参加させていただきました。開催の背景を読ませていただきましたが、日中両国を中心にした世界経済が主テーマと思われます。ただ、私の専門は日本の伝統文化・茶道であり、中国諸思想との関連も多くあることから、私の今日の話と申しますか提案は智慧の宝庫である中国の諸思想や諸宗教と東アジアの特性、そして、これからの東アジアの役割についてお話をしたいと思います。

I 東アジアとは何処を指すか。

ひと昔前まで、「アジアは一つ」とか「東洋の心」などとアジアや東洋を一括りにした時期がありました。しかし、アジアとか東洋の表現ほど曖昧模糊としたものはありません。

地理的には東端は日本ですが西端は特定しにくいのです。と言う私も茶道を日本の綜合文化の粋を超えて「東洋文化の精華」と表現しますが、それは西洋の価値観を超える文化を強調したいがための表現であります。

このフォーラムでは「アジア東方」とありますが、私の勝手ではありますが、「アジア東方」を「東アジア」として捉えたいと思います。

現在の経済的な地域連携協定は拡がりを見せ、東アジア地域包括的経済連携協定(RCEP)は ASEAN+日本・中国・韓国・NZ・豪州をも含んでいます。しかし、私は歴史的・文化的な面から ASEAN からベトナムを切り離し、中国文明圏である中国(含台湾・香港)、北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)、韓国、日本、ベトナムの五か国を東アジアと捉えたいと思います。東アジア五か国は一つになれる要素があるのです。

その理由は、この五か国は、元来は漢字文化圏、三教(仏教・儒教・道教)文化圏であり、文化的思想的宗教的な共通の基盤の上に立っているからです。勿論、五か国にはそれぞれ固有の宗教があります。例えば、日本なら神道、ベトナムならカオダイ教など。また、韓国は近代にはキリスト教が普及していますが、普遍的宗教と思想である仏教・儒教・道教の三教の支配圏です。

II この東アジア五か国の思想的宗教的特色

これらの五か国では、この三教が各国内で仏教徒が〇〇%、儒教徒が〇〇%など、それぞれの信者がその国に混在しているのではなく、それぞれの国民・人民の一人一人の心の中に三教や在来の宗教やキリスト教までを矛盾なく受容していることが特色です。日本を例にとります。元旦は神社に初詣、春秋の彼岸やお盆は仏教寺院、そしてクリスマスも楽しむし、また、人倫や社会的規範は儒教的、自然観や宇宙観は道教的などを矛盾なく受容する“寛容性”(おおらかな)ある民族です。一神教の国からは宗教的節操がないといわれますが、それは寛容性であり、五か国共に共通しています。

社会主義国の中国、ベトナム、北朝鮮についてはそれぞれ事情が異なりますが、現況の北朝鮮でさえ儒教の DNA が今なお生きずいていると実感するからです。それは私が中国に 125 回、また北朝鮮を含めてあとの四か国もたびたび訪問した体験からも実感できるのです。この東アジア五か国の地域にも個人にも釈迦の仏教、孔子の儒教、老子の道教の智慧が脈々と今なお生き生きと続いているのです。

仏教は個人的な修行に於いて高い精神的な境地(悟り)に達しようとする。儒教の最高の徳目は「仁」であり、“人が二人”であり、常に他者との関係で普遍的な愛を説く。道教は自然観や宇宙観を説いている。三者三様の深遠な思想を自分の心に矛盾なく受容するのです。

日本の一例ですが、聖徳太子が国家建設のために創案した 17 条憲法は儒教や道教の底流にある陰陽思想にもとづくものです。陰の極数 8 と陽の極数 9 を和合・交合せた 17 です。陰と陽は単に陰と陽の二者に分けるだけではなく、陰陽が交合・和合することで創造を生む。新国家建設には憲法が必要であり、その憲法は 17 条でなくてはならなかったのです。平城京や平安京は陽であり吉である青(緑)と丹(赤)を中心に黄、白、黒の五色で造営されている。これは中国の宇宙観である五行思想にもとづくものです。万葉集の有名な一首に「青丹吉(あおによし)……」はここに由来しています。また、東大寺が総国分寺、各地に国分寺が、また多くの神社も国家鎮護のために設けられた。これが人々に心理的な安心感を生み、国家の安定にもつながってきたのです。多様性、寛容性のある日本人と日本の国の相(すがた)です。

古代から人々の心 n ありようや国家形成まで多様な宗教や思想を矛盾なく受容してきた一例です。

東アジア五か国の中に世界で社会主義を自認する五か国の内、中国、北朝鮮、ベトナムの 3 か国がこの東アジアに共存できるのも、こんな多様性と寛容性があるからかも知れないと思っています。

III 「克己復禮為仁」(論語)

現在、自由貿易協定が重層的に締結されていますが、常に「Win Win」と言われている。経済、特に世界経済に全く素人の私には勝者があれば敗者があることが常識であり、勝者

と勝者、敗者と敗者は考えにくいのです。しかし、私は標記の教えがあればこそ「Win Win」が実現できそうに思えます。

克己は私欲我欲を抑制することが禮である。その禮は互いに慎むことである、その慎むは敬(敬う)と同じ意味を持つ。お互いが欲を抑制し、相互に慎み相互に敬い合えば仁、即ち普遍的な愛に繋がっていく。「Win Win」の関係は利潤を取り合うバランスではなく利潤を譲り合うバランスではないかと思われます。孔子はすべてにこの禮が必要と説きます。喧嘩するときも禮が必要と説いている。

子曰 恭而無禮則勞 慎而無禮憊 勇而無禮則乱 直而無禮則絞(論語)

禮とは人と人、社会と社会、国家と国家など他者との良好な関係を築く潤滑油です。決して型苦しいものではないのです。禮教と言われる儒教の大切な教えです。ほんの一例を挙げましたが、中国の深遠な諸思想には珠玉の名言に溢れている。日中を基軸に東アジア 5 か国が共同で東アジアの智慧を再考、研究をし、そこから更に枝を継ぎ、人類の発展と平和のための新たな智慧の発信が出来るのではないのでしょうか。東アジア 5 か国は歴史的文化的な共通基盤があり、経済的にも成長が期待でき、歴史的にも知力旺盛な地域です。寛容性のある民族の共同体が世界に及ぼす影響は大きいものがあると思っています。

安全保障や経済だけではなく文化的な共同体が学者、研究者、学生、また教育やスポーツの交流を促進し、世界をリードする東アジア共同体が国家体制を超えて構築されることを期待したいと思っています。

東アジアが国家の体制の違いを超えて何事にも“多様性”“寛容性”“慎み敬う”民族の共同歩調が実現できれば、「東洋の智慧でアジアの世紀の任を迎えに行こう」が実現できるのではないかと思う。